

特集：北陸新幹線の開業と交通まちづくり

「新たな成長期を迎えた富山地鉄・万葉線」

地域で守った

「赤い電車」が走るまち

「赤い電車」で有名な万葉線は、

平成14年、地域の熱意によって廃線危機を乗り越え、

日本初の第3セクター方式の路面電車として再生した。

その起点となる高岡市では、

高岡駅と北陸新幹線新高岡駅、二つの駅を拠点に、

「都市機能の向上」と「まちの魅力の創出」が進められている。

新幹線開業後を見据えた交通政策と万葉線の取り組みを通して、

高岡市の交通まちづくりを紹介する。

文●茶木 環／撮影●織本知之



地域の熱意が存続を実現

富山県内の北陸新幹線3

駅のうち最も西にある新高

岡駅は、現在の終点「金沢

駅」の1駅手前に新設され

た。高岡市はかつて高岡城

の城下町として繁栄した歴

史あるまちであり、その高

岡市の市民の足として日々、利用されて

いるのが万葉線だ。

万葉線は、富山地方鉄道が開通した軌

道線をルーツに68年の歴史を持つてい

る。現在は、高岡駅と射水市新湊を結

び、高岡駅―六渡寺間の高岡軌道線（8

km）と鉄道である六渡寺―越ノ湯間の新

湊線（4.9 km）、二つの路線を路面電車

タイプの車両が直通している。

経営主体である加越能鉄道（当時）

が、路線の廃止を表明したのは平成10年

だった。ピーク時には約475万人（昭

和47年）を数えた年間利用者数が

144万人（平成5年）にまで減少し、

国の欠損補助打ち切りを機に、加越能鉄

道はバス代替運行を提示。これに対して、

高岡市・新湊市（現・射水市）、両市民、

経済界は連携して存続運動を展開した。

そうした地域の「存続」への熱意が実を

結び、平成14年4月に第3セクターの新

会社「万葉線」として運行を開始した。

「失った鉄軌道を復活することは難し

い。万葉線は住民が『必要だ』と立ち上

がった中で存続運動の輪が広がり、残す

ことができた。万葉線が重要な生活路線

き都市の装置であることは、住民がいちばんよく理解している」と高岡市の藤井久雄都市創造部長は語る。

再生後の万葉線は堅調に利用者数を回復し、平成26年度には125万3000人を記録している。

アイトラムが新たな観光資源に

今では万葉線の象徴ともなっている2連接の低床車両「アイトラム」は平成16年から導入を開始し、現在では6編成を保有している。色鮮やかな赤いボディに、螺鈿細工で社のシンボルマークがあらわられた車両デザインのキーワードは「情熱」「元気」。高岡のまちと万葉線の活性化への思いが込められている。

「日本海側の降雪地帯に初めて低床車両を導入するというところで、技術的にはかなり苦労しながら車両やシステムの改良を重ね、ようやく営業運行を実現することができた」と万葉線の村岡正行総務部総務課係長は当時を振り返る。

近年、人気を呼んでいるのは、平成24年から運行している「ドラえもんトラム」だ。高岡市がドラえもんの作者、藤子・



高岡市都市創造部 部長

藤井久雄

Hisao FUJII

特集：北陸新幹線の開業と交通まちづくり

【新たな成長期を迎えた富山地鉄・万葉線】



F・不二雄氏が少年時代を過ごしたゆかりの地であることにちなんで誕生したもので、アイトラムの1編成の内外装を藤子プロによるデザインでフルラッピングし、ドラえもんの世界を演出している。

「最初はドラえもんの1日乗車券を作成したが、もっと発信力を高めようとして、車両のフルラッピングに取り組むことになった。ドラえもんはファン層が幅広い。ドラえもんトラムの乗車を目的に、海外から訪れる観光客も多く、台湾や韓国ではこのトラム乗車が組み込まれた観光ツアーが実施されている」（村岡係長）

現在ではアイトラムとともに、このドラえもんトラムが高岡市の新たな観光資源の一つとなっている。ドラえもんトラムの運行は当初、平成26年9月までの予定だったが、3年間に40万人以上に利用され、好評のため、さらに3年間延長されることになった。ちなみに高岡市でも平成27年12月、万葉線沿線にある高岡市美術館内に「高岡市 藤子・F・不二雄ふるさとギャラリー」を開設したほか、高岡駅周辺にオブジェを設置するなど、発信に広がりを持たせている。

地域交通の利用促進に向けて、広域連携の観光施策も展開されている。高岡市・射水市・富山市が連携するもので、土休日に、万葉線・射水市コミュニティバス（海王丸・ライトレール接続線）・県営フェリー・富山ライトレールが接続するダイヤを設定、海辺空間を中心に3市をつなぐ回遊ルートを形成している。

もともと高岡は歴史・文化のまちとして名高く、平成27年に「加賀前田家ゆか

りの町民文化が花咲くまち高岡一人、技、心」として日本遺産に認定されているが、万葉線を活用したさまざまな観光施策を積極的に展開、高岡市の多彩な魅力創出につなげている。

高岡駅・新高岡駅が拠点の交通政策

その万葉線の起点であり、高岡市の中心市街地に位置する高岡駅は、JR西日本城端線・氷見線、あいの風とやま鉄道が乗り入れ、路線バスが発着する交通拠点であり、富山県西部の交通結節の核を担っている。

高岡市では、南北市街地の一体化と交通結節点の強化により中心市街地の活性化を図るため、平成17年より高岡駅周辺整備事業を推進し、橋上駅舎や南北自由通路を新設。平成26年3月には新駅ビル「クルン高岡」が開業し、万葉線が乗り入れを開始した。従来あった万葉線の高岡駅前停留所を廃止し、軌道を100m延伸して駅ビル内に3面2線の「高岡駅」停留所を新設。万葉線と路線バスの待合室がある「交通広場」のほか、高岡駅と周辺施設につながる約140m長の全面屋根付きデッキや駅前広場の供用を開始した。また、これに伴い、万葉線では高岡駅の発車時刻を毎時0分、15分、30分、45分と利用者に分かりやすいダイヤに改正している。

「駅ビルに乗り入れたことで、屋内での乗り換えが可能になった。JR線やあいの風とやま鉄道、路線バスなど駅での乗り換え環境が大きく改善され、バリアフリー化も含め、利便性が格段に向上し



6



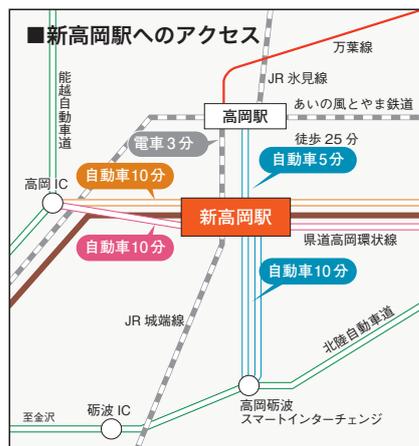
7



8



9



たと市民の方々にとっても喜んでいただいている」と藤井部長は語る。

翌27年3月に開業した新幹線駅「新高岡駅」は、高岡駅の1.5km南に位置する。新幹線駅と城端線の新駅が開設され、高岡駅とは城端線または路線バス（1時間に6〜8本）でアクセスできる。

北陸新幹線の開業効果は高岡市においても顕著で、中心市街地の交流人口が増加し、例えば代表的な観光名所である国宝瑞龍寺の入場者数は前年に比べて1.7倍に伸びているという。

また、「金沢を訪れた個人旅行者が高岡まで足を延ばし、万葉線の路面電車に乗ること自体を楽しみながら、射水市港湾の観光施設まで移動している。金沢方面との人の行き来が増えたことを実感している」と村岡係長は語る。

一方、高岡市周辺には能越自動車道や北陸自動車道のインターチェンジが3カ所ある。高岡市では新幹線開業に合わせ、「十分圏域の形成」として、高速道路から10分以内で中心市街地に入れるよう幹線道路の整備を戦略的に推進してきた。

今後は、新高岡駅へのアクセスを向上させ、新高岡駅を広域の高速交通結節点として整備していく方針だ。現在、新高岡駅のパス乗り場からは、富山県の五箇山と岐阜県の白川郷へ向かう「世界遺産バス」や和倉温泉へ向かう「わくライナー」、小矢部市のアウトレットモールへのアクセスバスなどの高速バスが発着



万葉線株式会社
総務部総務課 係長
村岡正行
Masayuki MURAOKA

「新高岡駅を『県西部・飛越能地域86万人の玄関口』と位置付けている。新高岡駅を、高速道路を利用して各地を周遊する観光バスの発着地としても活用し、観光面での利用を拡大していきたい」と藤井部長は語る。

万葉線でもこうした広域交通との接続に寄与する取り組みを行っている。新幹線開業時には、上りの始発（米島口発）の時刻を15分繰り上げ、5時31分とした。これにより、あいの風とやま鉄道や城端線を介して、新高岡駅や富山駅に停車する始発の新幹線への乗車が可能になった。新幹線の新高岡駅の停車率を上げるため、高岡市民を中心に「一人一客・一人一乗車運動」が展開されているが、こうした地域の取り組みも一助となる。

高岡市は、都市機能の拠点として高岡駅と新高岡駅、二つの駅を一体的に整備しながら、それぞれの特性を活かした交通ネットワークの構築を進めている。

既存の公共交通の可能性を探る

ところで、高岡市では、新幹線開業後

特集：北陸新幹線の開業と交通まちづくり

【新たな成長期を迎えた富山地鉄・万葉線】



1 曹洞宗の名刹、国宝瑞龍寺（提供／高岡市） 2 総延長 3.6km の新湊大橋 3 3 週間にわたり射水市で開催される3つの曳山まつり。映画「人生の約束」では「新湊曳山まつり」が舞台となった（提供／富山観光連盟） 4 子どもたちに人気の「ねこ電車」 5 万葉線高岡駅開業式典 6 「ドラえもんトラム」目当ての観光客も多い 7 8 市民に愛される赤い「アイトラム」 9 高岡駅ビルに整備された万葉線と路線バスの待合室「交通広場」

のまちづくりを見据え、平成27年度に建設部と都市整備部を統合、「都市創造部」として発足させた。都市計画と交通政策を一元的に進めていく高岡市のまちづくりの姿勢が、その名に表れていると言えるだろう。万葉線も、都市創造部が担当している。

「昭和30年代の高度成長期から、高岡市のまちの基盤整備が進められてきた。将来を見越して進めてきた道路整備はほぼ完成し、鉄軌道は東西南北に整い、半世紀にわたって最大のテーマであり続けた新幹線も開業した。そうしてできた基盤の上に、どういう都市をつくっていくのか。これからのまちづくりは、あるものをいかにして活用していくか、リノベーションしていくことが重要であると考えている」と藤井部長は語る。

まちづくりの基本政策として、公共交通のあり方についてさまざまな議論が進められている。万葉線についても延伸や城端線・氷見線乗り入れなどの可能性が検討されている。平成26年には、市民団体「万葉線を延伸する会」が設立されるなど、市民の関心も高い。

そうした中、平成26年7月には、約1カ月間にわたり、万葉線でハイブリッド電車「ハイ！トラム」の実走試験が行われた。これは鉄道総合技術研究所が開発した試験車両で、大型のリチウムイオン電池を搭載し、架線のない区間でも走行することができる。実走試験では、充電状況や走行可能距離、省エネ効果などの調査が行われ、さらに公共交通への啓発を目的に、市民を対象に試乗会も実施さ

れた。可能性の一つではあるが、こうした車両が使用できれば、万葉線の城端線・氷見線乗り入れも実現でき、沿線地域と新高岡駅のアクセスが格段に向上する。現段階では、そうした公共交通の可能性を探り、議論を重ねていくところだ。「万葉線に限らず、鉄軌道にはさまざまな可能性がある」と考えている。現状では、万葉線の延伸や城端線・氷見線乗り入れを実現するには、多くの解決しなければならぬ課題がある。次の展開に持つていくには時間がかかるが、交通政策を含めたまちづくりには、その先へと進む可能性の種をまいておくことが大切だと思う」と藤井部長は語る。

「新しく整備された高岡駅、新幹線と城端線に新設された新高岡駅、そして次の新駅と短期間にこれだけ多くの駅が整備されたのは高岡市制始めて以来のことになる。地域交通の利用者を増やしていくのは厳しい時代だが、都市機能として必要な公共交通にはきちんと投資し、住民や訪問された方に積極的に利用していただけるようにしたい」（藤井部長）

高岡駅や新高岡駅周辺には宿泊施設が新設されるなど民間投資も進んでいる。これまでにつくり上げてきた都市基盤をベースに、万葉線のように地域で守り続けてきた公共交通を活かし、未来へつなぐ。高岡市では、「都市機能の向上」と「まちの魅力の創出」の両輪での推進を目指し、ポスト新幹線のまちづくりが進められている。

高岡駅や新高岡駅周辺には宿泊施設が新設されるなど民間投資も進んでいる。これまでにつくり上げてきた都市基盤をベースに、万葉線のように地域で守り続けてきた公共交通を活かし、未来へつなぐ。高岡市では、「都市機能の向上」と「まちの魅力の創出」の両輪での推進を目指し、ポスト新幹線のまちづくりが進められている。

高岡駅や新高岡駅周辺には宿泊施設が新設されるなど民間投資も進んでいる。これまでにつくり上げてきた都市基盤をベースに、万葉線のように地域で守り続けてきた公共交通を活かし、未来へつなぐ。高岡市では、「都市機能の向上」と「まちの魅力の創出」の両輪での推進を目指し、ポスト新幹線のまちづくりが進められている。

高岡駅や新高岡駅周辺には宿泊施設が新設されるなど民間投資も進んでいる。これまでにつくり上げてきた都市基盤をベースに、万葉線のように地域で守り続けてきた公共交通を活かし、未来へつなぐ。高岡市では、「都市機能の向上」と「まちの魅力の創出」の両輪での推進を目指し、ポスト新幹線のまちづくりが進められている。